

鉢巻と禪の民俗

飯島 吉晴

1. 病鉢巻の民俗的系譜

病鉢巻は歌舞伎の扮装用語で病気や狂乱などの異常な状態にある人を表象する鉢巻のことであり、通常は紫縮緬で頭部左側に結びをつくって病体であることを表した。歌舞伎の狂乱物の主人公の場合も、頭に紫縮緬の病鉢巻を締め、片肌脱ぎとなって笹や扇などを手に持つのが共通の特色になっている。

歌舞伎では、鉢巻の色や締め方は役柄できまっており、立ち役の武士は城、二枚目は紫、女形は白または鴉色で、通常は右側に結ぶが、病鉢巻の場合は異常な状態にある人を示すためか左に結ぶことになっている。歌舞伎十八番の「助六」では、助六は蛇の目傘をさして江戸紫の鉢巻の上部をねじって輪にし右に結ぶのが決まりで、若衆歌舞伎以来の風流歌舞伎の系譜を引くものとされている。因みに、助六寿司は助六の愛人揚巻の名前に由来し油揚げに包まれた稲荷寿司と海苔で巻いた巻き寿司を組み合わせた寿司である。

鉢巻は、鎌倉時代以来、烏帽子や頭巾を固定し脱落を防いだり、合戦などで精神を引締め縮めるための軍装の一種としても長く用いられてきた。武家故実書等には、大将は必ず紅を用い、それ以下は白でも黒でも可としている。鉢巻は、戦乱の多い時代には軍装の威容を整えるだけでなく、髪のみだれや汗止めとしての実用的な機能を有していたが、近世になって天下太平の時代を迎えると風流踊りの扮装に用いられ、御あ歌舞伎の盛行とともに演劇の舞台に取り入れられたり、粋な職人たちの仕事用にも用途が拡大していった。時代劇などの病鉢巻も直接的にはこの歌舞伎の伝統を引くものといえよう。

ところで、『魏志倭人伝』に「男子は皆露紹し、木綿を以て頭に招け」とあるのが鉢巻の最も古い文献記載の1つとされており、古くは抹額（まっこう）と称されていたが、後世はもっぱら鉢巻と呼ばれた。また古代の冠位十二階の制度では冠の色で位階を表示したが、琉球王朝にも同様の制度があって、男子が礼装の際には鉢巻状の冠をつける習わしであった。

鉢巻は種族や身分階層を表象する扮装としてだけではなく、非日常的な状態にあることを示す印としても用いられてきた。伊豆諸島には、近年まで女性が婚礼に正装して参加する際に紫縮緬の鉢巻をしたり、葬式に鉢巻をして参列する風習がみられ、沖縄でも祭儀や葬式の際に女性が鉢巻をする風があった。本土でも、神仏に参詣したり、祭礼で神輿をかつぐ際に鉢巻をする例は少なくない。

客や人前に出るのに手拭いをかぶって頭髪を覆い隠したり婚礼で花嫁が角隠しをしたりするのも鉢巻の一種と考えられ、ハレの非日常的状態やモノイミの状態にあることを示すかぶりものということができる。『江戸名所図会』の上野寛永寺の清水堂花見の場面にも角隠しをした女性の見物客が多く描かれている。また頭痛その他の病気や出産の際に鉢巻をする風習も戦後の高度経済成長以前までは広くみられ、これらは病鉢巻に直接つらなるものであった。病気は

健康な正常な状態からみれば異常な一種の危機的状态といえることができる。

近世の『女重宝記』には、昔の女性は膏澤（油気）をあまり使わず髪が乱れやすかったので、綿帽子や鉢巻をしたとあり、実用的には頭髮の乱れを防ぐため、これが他人の面前に出る場合の礼儀とされ、されに汗止めや気を引き締めるのにもコウカがあるとみられ、日常生活でもさまざまな方面で使われるようになっていたのであろう。ただし、鉢巻そのものの歴史は古く、基本的には日常的な扮装というよりもむしろ戦や神事、祭礼、冠婚葬祭、病気等の非日常的状态にあることを表象するかぶりものの一緒であったといえることができる。

2. 褌の種類と効用

褌は、古くはハダバカマとかタフサギ（犢鼻褌）といったが、方言でもコバカマ・コンバカマ・サナギ・サナジ・シタオビ・シメコミ・スコシ・タナ・タンナ・ヘコ・フゴメ・マワシなどさまざまな呼ばれ方をした。同じく褌とはいっても、その形状には帯状のものと袴状（パンツ状）のものの2つがあって、前者は南方系の民族の、後者は大陸伝来の北方系の民族の蔽腰服物の系統を引くものではないかという指摘もなされている。フンドシという言葉の語源は、「踏み通し」であるとされ、ハダバカマに両足を踏み通して身につけたことによる命名とみられている。ハカマ・コバカマ・フゴメなどの呼称は、本来はこうした袴状の褌にもとづいたものといえる。『松屋筆記』には、「さてフンドシと云は踏通しの義にて、褌の短き様なるを、犢鼻褌とて、両足に踏通して著すれば然いふ也。今の奴ふんどしとてしむる物は、古の下帯の転れる也。越中フンドシは下帯を切て短くし、それに紐を付て製出たりと見ゆ」とある。しかし、実際に褌として一般に使用されてきたのは圧倒的に一枚の帯状の布を股間から腰部に巻きつけて着装する種類のものであった。褌は、中世にはタツナ（タンナ）、近世にはシタオビ（下帯）と多く呼ばれたように、やはり帯状の褌がすでに一般的であったようである。なお、女性の腰巻をフンドシなど男性の褌と同じ呼称で呼んでいる地域も多くみられた。

さて、この帯状の褌には、六尺褌・越中褌・畚（もっこ）褌などの種類がある。六尺褌は長さ約180センチの一幅の布で、一端で陰部を蔽って残りの部分を腰に巻きつけ、他端は背後で結束したり、単に挟み込んだり、前に垂らしたりした。六尺褌は大正時代までは全国的に広く採用されていたが、その後衰えてかわって越中褌が全国的に行われるようになった。守貞の『近世風俗志』には、「褌宇和訓こはかま、者したのたふさぎ、慶長以来、今製の六尺褌を専用す、天正前は麻布等長け四五尺なるを、其の半を2つに裂き分ち、これを腰に巡し前に結び、股下を全幅の方を通して前に挟む、今の越中褌に似たり」とある。この越中褌は、六尺の半分の約90センチの布の一方に約1メートルの細い紐をつけたもので、この紐を腰に縛ってから股間をくぐらせた布を通して前に広げて垂した。越中褌は、その着法からツリタンナ、ツリフゴメとか、ムソ、ドモコモなどとも地域によっては呼ばれた。畚褌は、越中褌よりもさらに短く、前後を隠せるだけの布の両端に紐を通し、布を跨いで踏み込んで、片脇で縛った。大阪監獄では、長さ約45センチの赤布の畚型の褌を囚人に与えていたという。この畚褌は、越中褌の半分の長さの布でよいから大分節約にはなる。褌は古くは古墳時代の人物埴輪にその例がみられ、大正末まで一般的に用いられてきたが、昭和に入るとメリヤス製のサルマタやキャラコ製の白いパンツの普及で褌の使用は次第に減ってきた。しかし、軍隊などでは越中褌を採用していたため、

戦後になってパンツが一般化してもやはり年配者の中には褌でないとしっくりせず褌を使いつづける人も多かった。

質問にある特定の職種によって褌が使い分けられていたかどうかに関しては、褌の材質などが階層の上下によって異なっていた事実はあるが、褌の種類が職業によって違っていたとはなかなか言えないのではなかろうか。確かに、相撲取りのマワシなどは職種による特別な褌の事例ではあるが、その他の職業でははっきりしておらず、ほぼすべての人が褌をしていたのだから、むしろ時代や地域などによる相違の方が大きいように思われる。『嬉遊笑覧』には、相撲の褌について、「古はさらにもいはず、文亀永正の頃までも、角力とるに用ひしは麻布にて、白或は茜染を、三重又は二重にも結べりとぞ、其後に至りては、常人も純子、綸子、綾繻子などを用ひたれば、角力には勿論なり」とある。また『近世風俗志』には、「今世ふんどし、貴人は白羽二重、土民は白晒木綿を本とす、長六尺呉服尺也。土民は白木綿を本とすれども、中以上は白賀絹を用ひ、又美を好む者は、大幅或は小幅織の縮緬、又は白龍紋等をも用ふ。又江戸にて三四十年前、俠気ある徒等は緋ぢりめんを用ふ。今世三都ともに小児は往々用之、又三都ともに文政中、賤業の美を好むは紺縮緬、平日紺木綿等を用ひし、又紺絞りも用ひし也。今世三都とも白木綿を本とすれども、或は絞りを用ふもあり、小紋中形等を用ひず。又今世京阪は、縮緬以下木綿褌ともに両端を細く折りて縫之、号れて石突と云ふ。江戸は不縫之。因云綿褌京阪は洗之者、洗後糊を解きてつけ乾す、江戸は糊を用ひず」とあり、粋な人々の中には緋や紺の褌を用いていたことがわかる。また浴衣と同様に京阪地方では洗った褌には以前の麻布の感覚を保持すべく糊づけしていたらしい。現在はスウェット・スーツなどの潜水具に変わってしまったけれども、潜水漁業に従事する海民の中には、鮫や鯨の害をさけるために赤褌を締めたり六尺褌の端を長く流して泳いだり、あるいは海女が褌をして潜るところもみられた。

かつては褌や腰巻をすることは大人の資格であったから、成年式に際してフンドシ祝いやヘコ祝いなどといって、叔母などから赤か黄色の木綿の六尺褌を贈られ締めてもらう風習もあった。同時に性教育も施してもらったともいう。また妊婦が夫の褌を腹帯にすると安産であるともいう。また各地の神社の祭礼には、昔ながらのシメコミや褌をして参加するものが今でも多くみられ、気分を引き締めると同時にハレの非日常的な状態を表示する役割を果たしている。褌の効用については、回答するだけの用意が今のところない。赤い褌は信仰的要素だけでなく、衛生面でも実際の効用があるとしばしばいわれたが今1つ明確ではない。ただ「ゆる褌」というと気分がゆるみ弛んだことを表すように、褌をぎゅつと締めれば逆に下腹に力が入り気力が充実することは確かである。越中褌が身体にぴったりとはりついたブリーフなどに比べて、通気性がよくしかも締めつけがきつくないために局部の衛生や成長によいとはいえる。しかし、実際には程度の問題であって、伝統に基づいた気分や感覚の相違にすぎないのかもしれない。なお、褌を研究した興味深い文献として、福富織部『褌』（香蘭社 1927年）がある。

（後記）本稿は『日本医事新報』4172号（2004年4月10日）と同誌3811号（1997年5月10日）掲載の小文に加筆訂正したものです。